

源俊房の往生と作善

田 中 夕 子

はじめに

源俊房（一〇三五―一一二二）は、往生人として『後拾遺往生伝』『三外往生記』に収録された平安時代後期の公卿である。往生伝二伝に収録されるほど、往生伝の撰者達のなかで俊房の往生は知られたものであった。また、俊房は往生人のなかでは珍しく日記が残っている。

俊房に関する先行研究は、政治史や有職故実、家の成立に関するものが多くを占める⁽¹⁾。しかしながら、俊房の信仰を主題に取り上げた研究は管見ではない。

小稿では、俊房の日記『水左記』を中心に用いて、俊房の信仰のあり方と往生伝の記事との関わりを考察する。日記と往生伝の記事の比較から、往生伝執筆にあたり、撰者により記事が意図的に選択され、理想的な「往生人の俊房」として伝記が作り直されていることを明らかにしていく。

一 源俊房について

源俊房は村上天皇を曾祖父にもつ村上源氏の一族であり、父は源師房、母は藤原道長の女尊子であった。婚姻関係を通じて摂関家と密接な関係を持っていた。

俊房は参議、右大臣等を経て左大臣となった。晩年堀河天皇の皇位継承に関して、後三条天皇の皇子であった輔仁親王を支持したが、白河院の孫で堀河天皇の子である宗仁親王（鳥羽天皇）が立太子した。加えて、俊房の男であり、輔仁親王の護持僧を務めた醍醐寺僧仁寛が、鳥羽天皇を暗殺するとの落書が発見され⁽²⁾、政界での立場は弱体化した。保安二年（一一二二）五月に比叡山において出家して法名を寂俊と名乗り、後十一月に亡くなった。日記『水左記』⁽³⁾は後期摂関家、院政初期を知る上で価値ある史料である。

彼の親族である村上源氏一門のなかで往生伝に収録された者は三人と多く、俊房の男であり醍醐寺座主で三宝院開祖の

勝寛、弟顕房の男で甥の雅俊、醍醐寺座主の定海などがある。

二 往生伝に描かれた俊房

『後拾遺往生伝』⁽⁴⁾によると、俊房は文章に優れており、政理に通じていたこと、道心があり、ややもすれば世務を抛つて仏事を修していたこと、晩年には寝府の傍らに仏堂を建て、阿弥陀迎攝像を安置して、観念経行の所としており、常にこの前において必ず終焉したいと話していた。保安元年(一一二〇) 辞職して、翌年二月に人知れず出家して自ずから寂俊と称した。その五月、台嶺において受戒した。七月以後、病となり、十一月十日心神不例となった。雲居寺瞻西上人を請い、法要を誦し、仏号を唱え、後世の契りを結んだ。その後、多年持経としていた法華經常不輕品と如意輪経を誦し、手ずから華嚴経首題名字を書いた。そして、持仏堂の前で五色の縷を仏像の手にかけて、その糸を引き、端坐念仏して亡くなった。臨終や葬礼、その後にも数多くの奇瑞が現れた。

『三外往生記』の記事も『後拾遺往生伝』とほぼ同様であるが、瞻西との挿話は記されていない。そして、病となった月を十二月、命終を十二日とする。その他、俊房の死後、ある女人が夢で、一僧侶が禅府の使いと称し、書札で「適雖往生未覚悟。依最後念仏。得住不退地云々」と伝えられたのを見たとされる。

源俊房の往生と作善(田中)

このように両伝は一部異なる記事がある。しかし、共に政治的不遇な事件には触れていない。

三 『水左記』にみる俊房が関わった仏事

(1) 病氣平癒

承保四年(一一七七) 七月から八月にかけて、流行病(咆瘡)がおこり、俊房自身も病に冒され、自身の病状や、周囲で亡くなって者たちについてのことが日記に残されている。

病氣平癒のために、受戒、社寺での經典誦誦、諷誦、摺写供養、莫大な造像(一万体造像の願)等が行われた。それと共に陰陽師による祭などが平行して行われていた。

『水左記』では、病氣平癒のために灸の治療や薬の服用等の医療行為が行われていた。しかし、その記事の数を上まわるほど平癒を祈る造像、読経等の行業の記事が多く記されていた。そこから俊房にとって、仏教的善行は治療法の一つであったことがわかる。

(2) 病氣平癒以外を目的とした仏法との関わり

千僧供 承暦四年(一一八〇) 三月二十七日には、天台(比叡山)において千僧供を曳かせている。これは「所願」によるものと記している。この日、金剛童子像を(三井寺)大智房に渡らせており、百箇日を限って供養させている。これは「偏與(守)昇進」と記している。その功あってか、その年には

昇進して弟の顕房より上の大納言となっている。

昇進を祈る背景は定かでないが、弟顕房の存在があつたのではないかと考えられる。俊房と顕房の官位はほぼ同じであり、時には顕房が俊房の官位を越えることもあつた。顕房昇進の背景の一つには、後三条天皇による俊房への一時的な報復措置があつたと考えられている。⁽⁶⁾理由には後三条天皇の同母姉である前斎院娟子内親王と通じ、後冷泉天皇の勅勘を蒙り、東宮(後三条天皇)の憤りをかつた経緯がある。

大師供(慈恩大師) 土御門の邸宅では、承暦五年(一〇八二)頃大師供(慈恩大師)が恒例の行事となつていた(承暦五年十一月十三日、十一月二十四日等)。慈恩大師への信仰は、後述の俊房の願文にも見られる。

その他、目的は不明なものが多いが、經典読誦や講説聴講、愛染王法、大威徳法、北斗法、最勝講、荒神祓などが行われており、生涯多くの行業を行い、修法等を行わせていた。

迎講 承暦四年(一〇八〇)十月八日には、清水寺橋(河原)で迎講が行われ、醍醐山聖人がこれを行ったとされる。俊房は、結縁のため参加していた。

その他 俊房は嫡男として父の追善供養や藤原頼通の忌日の法要、妻や母、姉妹の仏事(毎月御念仏、慈恩大師供等)、宮廷の仏事(季御読経や仁王会、御仏名等)、天皇家の仏事(白河天皇や太皇太后宮大夫を務めていたことから太皇太后である寛子(頼

通女)の仏事)、撰閑家の仏事等にも参加していた。加えて伝聞の經典書写や懺法等の仏事を記録しており、他者主催の仏事に興味を示していた。

以上のように、俊房は現世利益的な祈願を多く行つていたことがわかる。また、日常的に仏事へ参加していた。しかし、現世的な祈願は、往生伝には記されていない。

現状の日記なかには、往生を祈つたことや、そのための行業の記事は残されていない。しかし、迎講に結縁したことや浄土教と関わり深い瞻西との交流から浄土教への関心がみとれる。加えて願文には俊房の信仰が表われている。

四 俊房の逆修法会願文

俊房は康和四年(一一〇二)七月十九日に逆修法会を行っている。これは俊房六十八歳のことであった。『水左記』に記録が残っていないので当日の様子は不詳であるが、願文が残っている。⁽⁷⁾願文には、この法会に先だつて行われていた作善(書写や造像)とそれぞれの願意があげられており、それは以下の五つに分けられる。(1)自身の「心憑護衛」を願う——般若心経書写。(2)延久禅定前大相国(藤原頼通)の「成仏得果」を願う——両界曼陀羅各一鋪図絵、法華経書写、無量義経、観普賢経、阿弥陀経、大日経、金剛頂経、蘇悉地経(自書)。(3)自身の「令到覚路」を願う——三尺天台大

師、慈恩大師像各一体造立。(4) 母の「頓証菩提」を願う——釈迦・十大弟子一鋪図絵、大般涅槃經、後分、像法決疑經(自書)。(5) 自身の「為成正覺」を願う——釈迦・阿弥陀・如意輪觀音・虚空藏・地藏・不動等各一鋪。法華經・無量壽經・觀普賢經書写と模写。

願文では、自分の悟りを願うと共に、「猶子之義」があった養父の頼通や母(尊子、頼通異母姉妹)の成仏得果や頓証菩提を祈っていた。また、願文には往生伝に記された長年の持経であった法華經や如意輪經(如意輪觀音像)に関するもの、日記に書かれていた慈恩大師信仰が表れていた。

おわりに

俊房晩年の様子は子息師時の『長秋記』にも見えるが、俊房の仏事や造寺・造像などを詳しくは確認できなかった。しかし、天永元年(一一一〇)の堂供養願文(江都督納言願文集)から邸内に小堂を建て迎接像を安置したことがわかる。

往生伝における俊房の記事は、晩年から往生にかけての往生に関する行業の記事が中心であった。しかし、日記によると俊房には仏教への現世利益的な信仰が多くあったが、往生伝では取り上げられていなかった。また、往生伝では、政治家としての優れた面のみが記されるが、晩年の政治的に不遇な出来事は取り上げられていなかった。

源俊房の往生と作善(田中)

以上のことから、往生伝の俊房伝においては、現世利益的な行業は、往生のための行業として取り上げられていなかったといえる。往生のためには、「往生のための行業」が必要であり、それが晩年や臨終間近の行業として述べられていた。また、現世利益の記事は「動抛政務、只修仏事」に含まれていること読むこともできる。

このような往生人の行業の記事の取捨選択、記事の意味の読み替えを行っているのは、往生伝の撰者(『後拾遺往生伝』三善為康、『三外往生記』蓮禪)による。このような往生人の生涯を理想の往生人として再生させた例は他の往生人、往生伝にも見られる⁽⁸⁾。

往生伝に描かれた「往生人の俊房」の姿とは、撰者によって理想的な往生人として再生された姿ということが指摘できるのである。

1 村上源氏に関するものは多々あるが、小稿と関わりがあるものとして、龍爾「三宮と村上源氏」(『平安時代』春秋社、一九六二年)、角田文衛「村上源氏の埜域」(『王朝文化の諸相』法蔵館、一九八四年)、米谷豊之祐「村上俊房と院政開始期の政局」(『大阪産業大学論集』人文科学編六一号、一九八七年)、坂本賞三「村上源氏の性格」(『後期撰関時代史の研究』吉川弘文館、一九九〇年)、下向井龍彦「『水左記』にみる源俊房と薬師寺—太政官政務運営変質の一側面—」(『後期撰関時代史の研究』

源俊房の往生と作善(田 中)

吉川弘文館、一九九〇年)、平井一博『「今鏡」に見る村上源氏の二つの流れ―特に俊房系賞揚の意義について―』(『古代文化』五一、一九九九年)、土岐陽美「源俊房とその邸宅―「土御門」と「堀川」―」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第一五号、二〇〇五年)等がある。

2 永久の変は、白河院周辺による陰謀とも推測されている。永久の変については、前掲註1龍論文、坂本論文等に詳しい。

3 『水左記』(増補史料大成)。日記は、康平五年(一〇六二)(二八歳)から天仁元年(一一〇八)(七四歳)まで断続的に残る。

4 小稿では、往生伝は『往生伝 法華験記』(思想体系、岩波書店、一九七四年)を使用した。

5 瞻西(？)一一二七)は、出自は不明である。比叡山の僧で東山雲居寺に住み、雲居寺上人と称された。歌人としても知られ、俊房をはじめ藤原宗忠等多くの貴族と親交があった。井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九七五年)。瞻西と貴族との交友については、小熊幸「瞻西上人とその周辺―雲居寺に集う歌人たち―」(『国文学論考』二三号、一九八七年)参照。

6 前掲註1坂本論文参照。

7 『本朝文集』(国史大系)。

8 理想の往生人として描かれた例には『本朝新修往生伝』三〇藤原敦光伝がある。大曾根章介「院政期の一鴻儒―藤原敦光の生涯―」(『国語と国文学』五四―八、一九七七年)参照。

〈キーワード〉 往生伝、作善、現世利益

(佛敎大学総合研究所特別研究員)